

秋田高校 同窓会だより



AKITA HIGH SCHOOL alumni association news

創立150周年記念臨時増刊号

母校の創立150周年を祝うと共に、150年の伝統と歴史をいかにつないでいくか——。
財界や学界、マスコミ、スポーツなど様々な分野で活躍する同窓生たちから、
次代を担う在校生や未来の秋高生たちに伝えたいこと、期待することなどを、
自身の高校時代の思い出やエピソードを交えながら、自由に執筆していただく。

創立150周年記念臨時増刊号執筆者

※ご協力を頂いたのは次の方々です。

卒業年次	氏名		掲載面
S43	銭谷 眞美	元文部科学事務次官 秋田高校同窓会会長	2
S31	高橋 裕子	若菜会会長	2
S36	佐々木 毅	元東大総長	3
S40	橋本 五郎	読売新聞特別編集委員	3
S43	進藤 孝生	日本製鉄株式会社代表取締役会長	4
S44	秋山 正子	訪問看護師 ナイチンゲール記章受章者	4
S49	小泉 ひろみ	秋田県医師会会長	5
S50	駒橋 憲一	東洋経済新報社取締役会長	5
S51	三浦 衛	春風社代表	6
S52	瀬戸 泰之	前東京大学医学部附属病院長	6
S52	林 左絵子	次世代超大型光学赤外線望遠鏡 TMTプロジェクトメンバー	7
S54	齋藤 正直	専修大学野球部監督	7
S56	新出 康史	秋田ノーザンブレッツR.F.C 初代監督	8
S63	佐藤 巨光	有人宇宙システム株式会社ISS利用運用部長 兼新事業開発室長	8
H 3	湯田 淳	日本スケート連盟強化本部会副本部長	9
H 5	佐藤 祐輔	新政酒造株式会社代表取締役社長	9
H11	いとう まゆ (伊藤 美帆)	NHK「おかあさんといっしょ」 4代目身体表現のおねえさん	10
H15	丑田 香澄	一般社団法人ドチャベンジャーズ理事	10
H26	西澤 春佳	シルク・ドゥ・ソレイユ輪車パフォーマー	11

「秋高」を繋ぐ
— 母校創立150周年に寄せて —



秋高150 ～伝統は常に変化と共にあり～

70年たって思うこと



若菜会会長

高橋 裕子
(昭和31卒)

昭和28年(創立80周年の年)男子が多いことをあまり気にせず入学。入学してから、他都市から来ている同級生たちのことを知りみんな目的をしっかり持って受験したんだなあ——と、心の中でのんきな自分を恥じた。

入学して間もなく始まった応援練習は強烈だった。体育館に集められ、周りを上級生に囲まれ、「声が小さい!」と怒鳴られ、足踏み鳴らしておどされ、恐怖の初体験だった。おかげさまで、校歌、校友会歌、各部の応援歌は今でも歌えるし、3人の弟妹たちと一緒に歌っていたことも懐かしい。

しかし、素晴らしい先輩が多い学校に入学していながら、成績についてはあまり語れる状況にないが、思い出に残る先生は多い。

まず数学の山下三喜男先生。「教科書はどんどん進んでいいよ」とおっしゃったので、友達と競い合い楽しく学べた。

次に音楽の小田島次郎先生。授業が待ち遠しかった。先生の歌を聴くのが楽しみで「ローレライぐらいいは、ドイツ語で歌えるようになりなさい」と言われた時はびっくりだったが——、でも、小田島先生は優しかった。

先生たちとの思い出は年賀状交換の形で卒業後も続き、中でも櫻谷吾朗先生(2年次の担任)からの年賀状には、いつも心に響くコメントが添えられていて、励まされてきた。

最後に、図書部の上級生の存在もありがたかった。放課後図書室に行くと、図書委員の上級生たちもいて、学習のこと、進路のことなど真剣に議論している様子に、日ごろの自分の生活ぶりを正される思いがした。

また、教師になってからも転勤して行く先々で会う先輩たちには何かと世話になり感謝の気持ちを伝えると、「その気持ちを後輩たちに——」と言われ、秋高卒業の幸せを感じた。

今まで「どこを出たか?」ではなく、「何をしたか?」を念頭に生きてきたつもりだが、できないことが少しずつ増えてきている今、「小さなことでも誰かの役に立ちたい。最後の時まで」と願っている。

Profile

たかはし・ひろこ/1937年生まれ(旧姓菅原)。秋田大卒。大学卒業後教職に携わり飯島小学校を最後に1998年3月定年退職。以後、スグの子電話相談員、こころの教室相談員、人権擁護(子どもの人権専門)委員、児童センター運営委員等々。若菜会会長。

母校のほまれを拡げよよみに



元文部科学事務次官
秋田高校同窓会会長

銭谷 眞美
(昭和43卒)

私は、今から58年前の昭和40(1965)年秋田高校に入学した。入試は中学校全9教科の筆記試験、入学者数は550人、10クラス(共学2、男子8)、私は男子クラス1年I組だった。(ちなみに2年はJ、3年はD、全て男子クラスだった。)

私は、入学式での鈴木健次郎校長先生の「汝、何のためにそこにありや」の一言に強烈なインパクトを受けた。いつ、いかなる時、どこで、誰に「汝、何のためにそこにありや」と問われても即座に断言できる自覚的な生活をおくってほしい、との呼び掛けは私の心に深く染み込んだ。

高校生活は個性豊かな友人と出会え、刺激的で楽しかった。クラス対抗、雲隊が競う運動会、3Dがデコレーションで優勝した秋高祭、太平山登山、池田潔の名著「自由と規律」を皆で学んだ夏の生徒会合宿、「社会部」の巡検など思い出は尽きない。ガリ版刷りの文集「II(いちあい)の記」、生徒会誌「羽城」、社会部誌「南暁」などの編集もなつかしい。

私は青春前期とも言えるべき高校生の時期のすごし方の大切さをしみじみと思う。良き先生の下で、仲間とともに学び、自らの進むべき道を考える高校時代は人生における宝石のような貴重な時期である。

私の父象二郎も、戦前秋田中学で学んだ(昭和14卒)。数年前父の遺品を整理していると秋中時代からの親友の葬儀での弔辞の原稿を見つけた。水泳部での厳しい練習、東北大会出場時の喜び、秋田在住の同期が集い「十志会」と称し海外旅行など生涯にわたる交誼を結んだこと、そして秋中以来の友人の死去は自分の体の一部が失われたような痛みであり、痛惜の極みであると綴られていた。

同窓生、在校生の数だけ秋高生活の思い出、青春がある。私は、秋田高校が、これからも、在校生、同窓生の皆さんが、母校のほまれを四方に広げるような活躍する高校として発展して行ってほしいと願っている。

Profile

ぜにや・まさみ/1949年生まれ。東北大卒。文部省入省。文化庁次長、生涯学習政策局長、初等中等教育局長を経て、2007年7月文部科学事務次官。2009年8月東京国立博物館長。2022年6月から新国立劇場運営財団理事長。秋田高校同窓会会長。

高校時代に新聞記者を目指す



読売新聞特別編集委員

橋本 五郎
(昭和40卒)

秋田高校の3年間は、二つの意味でその後の私の人生を決めました。一つは新聞記者になりたいと痛切に思ったことです。中学2年の時、アメリカでは43歳のケネディ大統領が登場しました。「松明は若い世代に引き継がれた」という就任演説は田舎の中学生にも衝撃的でした。

高校時代の日記にはケネディに関する記述があちこちにあり、切り抜きも随分集めました。そのケネディが最も信頼していたのがニューヨーク・タイムズ紙のジェームズ・レストンという記者だったと後で知り、新聞記者になりたいと思いました。

あかあかと一本の道とほりたり

たまきはる我が命なりけり

斎藤茂吉の歌です。自らを振り返り、自分なりに新聞記者としての一本道をとほとほと歩いてきたという感慨があります。

もう一つは、高校2年の時に校長として赴任された鈴木健次郎先生の教えです。「諸君はいつ、どこで、誰にこう問われても直ちに断言できる人間になりなさい。それは『汝、何のためにそこにありや』です」。先生がこの言葉を発せられた時のシーンと張り詰めたような静寂さをいまも脳裏に蘇ります。それはまた秋高生にとって世代を超えて語り継がれた教えです。時に怠惰になりがちなのが日常を反省させられるのです。

社会人になるにあたって母に言われました。一つ目は、何事にも手を抜いてはならない。常に全力であたれ。二つ目は、傲慢になってはいけない。常に謙虚であれ。三つ目は、誰も嫌いになることはない。嫌だなと思ったら、その人の中に自分よりも優れているものがあるかを見よ。必ずあるものだ。そうすればもう嫌いになることはないよ。

鈴木先生と母の教えは一日として忘れてはいけないものです。残されたわずかな人生でも深く心に刻んでおかなければならないと思っています。

Profile

はしもと・ごろう／1946年生まれ。慶應義塾大卒。読売新聞入社後、76年より政治部、論説委員、政治部長・編集局次長を歴任。2006年より特別編集委員。2014年度日本記者クラブ賞受賞。主な著書に、「虚心に読む」(藤原書店)「宿命に生き運命に挑む」(藤原書店)「官房長官と幹事長」(青春新書インテリジェンス)他

傑出した人との出会いの場たれ



元東大総長

佐々木 毅
(昭和36卒)

人生は出会いの連続といってよい。その最初の出会いの場が私にとっては秋田高校であった。我々昭和36卒は駅前の校舎で3年間を過ごし、卒業した最後の学年である。この最初の出会いの場がその後跡形もなくなったのは残念至極である。

ところで出会いの中には勿論得難い親友との出会いも含まれる。現に、私にも秋田高校時代からいまだに付き合っている友人がいる。しかしながら出会いとして記憶に残り、人生の肥やしになるのは何か傑出した人間との出会いである。〇〇高校に入学したいと思って努力するのも、△△大学に憧れるのも、こうした人との出会いへの秘かな願望があるからである。

こうした傑出した人間、「すごい人」は日常の繰り返しを突破する新しい可能性を周囲に感じさせる力を持つ。当然、その刺激を受けて別の「すごい人」が登場する。勿論、誰が「すごい人」なのかを見極めるのも大切な能力であって、そういう感知能力を持たない不幸な人間もいないわけではない。

出会いは「すごい人」の発見で終わるわけではない。それというの、「すごい人」の発見は反射的に「自分は何者であるか」「何者であろうとするのか」という問いを生み出すからである。その結果、「すごい人」と同じ舞台で競争しようとする人も出てくるであろうし、それとは別の世界で「すごい人」を人知れず目指す人も出てこよう。このようにして若者は勢いよく人生を選び取っていくが、絶対的に正しい選択というものはあり得ない。

それにもかかわらず、「すごい人」との出会いは人生最大の醍醐味である。それは自らの人生を選び取るという贅沢を味わうことを可能にし、人生に一瞬の彩を与えてくれる。秋田高校に期待されるのは「すごい人」を捜し求め、あるいは自ら「すごい人」たらんとする若人の集う場であり続けることである。

Profile

ささき・たいし／1942年生まれ。東京大卒。元東京大学総長、現在、東京大学名誉教授、第28代日本学士院長、明るい選挙推進協会会長、令和臨調共同代表など。専門は政治学、政治思想史。主な著書に「マキアヴェッリの政治思想」、「政治に何ができるか」、「プラトンの呪縛」など多数。文化功労者、瑞宝大綬章、文化勲章受章。

「宮様の道路」が全国大会に



訪問看護師
ナイチンゲール記章受章者

秋山 正子
(昭和44卒)

わが母校は文武両道を掲げるにふさわしい実績を上げていて、応援団による昼休みを使った各クラスへの出張練習も、それなりに力が入ったものだった。秋田国体があった年ではなかったかと記録をたどってみたが、秋田国体は1961(昭和36)年の事で重なっていない。入学年は1966年である。皇族の方が来秋され、視察のために道路整備がなされるという事だった。

文武の「文」の方で、放送部の活躍が目立っていた。確か全国大会に出たのではないと思うが、その時のお題が「宮様の道路」というのだと記憶する。高校2年時=1967(昭和42)年=と思うが、これも記憶が怪しくなっている。

秋田高校へ向かう駅からの道路が舗装されたのだが、半分しか整備されなかったという話だ。その時の3年生が行政事業への批判も込めて、また、そのことをシニカルに、かつユーモアも含んで、淡々とニュースのような仕立てで、ドキュメント番組風に校内放送した。

普段は砂埃を上げてバスが走る、がたがた道の通学路。雨が降ると水たまりが結構できて、そこをよけて走るものだから、満員状態のバスに乗っているわれわれも、結構足を踏ん張らないとよろけてしまう。ましてや、その道を自転車で通学している生徒もいるので、この道の舗装は歓迎されたのだ。

しかし結果は半分のみ。日常の生活で使う庶民の苦勞には恩恵があるような、無いようなという状態である。

ひょっとして予算が厳しく、かつ時間がない状態での全面舗装は難しかったのかもしれない。そんな大人の事情など知らされる余地もなく、宮様がお通りになった後、あとの半分の舗装は、追加でなされることもなく時間が過ぎたという顛末記だった。

その作品で東北大会に出て、全国大会にまで選ばれた。最優秀ではないが、優秀作品の中に残ったと記憶する。放送部の快挙を、生徒たちは喜んだし、そういった批判的な番組制作を可とした学校の指導体制にも秋高らしいと懐かしく思いだしている。

Profile

あきやま・まさこ/1950年生まれ(旧姓辻)。聖路加看護大(現・聖路加国際大)卒。(株)ケアーズ代表取締役(白十字訪問看護ステーション統括所長)、暮らしの保健室室長、認定NPO法人マギーズ東京センター長。大学卒業後、臨床および看護教育に従事。1992年から東京都新宿区で訪問看護を開始。2011年高齢化の進む巨大団地に「暮らしの保健室」、2016年にNPOマギーズ東京開設。2019年第47回フローレンスナイチンゲール記章受章。

校章は知・徳・体の 三育の象徴



日本製鉄株式会社
代表取締役会長

進藤 孝生
(昭和43卒)

昭和40年の入学式。鈴木健次郎先生の潤いのある声での、「汝、何のためにそこにありや」と「学業とスポーツの両立」からなる学校長式辞で、私の高校生活は始まった。そして、この二つの教えがそれからの私の人生の大きな軸を作ってくれた。

「汝、何のためにそこにありや」は、人生という大きな生き方から日常の小さな行動に至るまで、全ての局面で明確な目的意識をもち社会への貢献を考えよという、今風に言えばengagementであった。「学業とスポーツの両立」には悩んだ。進学勉強のため運動部入部は当初の計画外。そこで「1時間練習」(1時間しか練習しない)を標榜していた児玉市郎監督指導のラグビー部に入った。池田潔(慶大教授)の「自由と規律〜イギリスの学校生活〜」を読みラグビー等を通じ、「自由」の前にまず「規律(服従)」を教える英国上流階級の教育に感銘を受けたことも理由であった。

それから3年、寸暇を惜しんで勉強とラグビーに打ち込んだつもりである。大学受験こそ浪人し東大紛争等の混乱の中で苦勞したが、ラグビーでは2・3年生時に全国大会(花園)に出場しそれぞれベスト4とベスト8まで進んだ。進学校としては珍しい好成绩であった。

実社会に出て、鉄鋼会社で長く人事・総務等、組織の運営に携わってきた。企業における個々人の能力には2要素があると感じる。Skill(技能・技術・知識)とAttitude(態度・考え方・価値観)であり、その人の総合的实力は両者の積である。双方の絶対値の大きいのが理想だが、片方が小さくても他が大きければ補える。どちらかがゼロなら全てゼロとなる。

鈴木先生の二つの教えは、結局、自らの生の意義を常に問いAttitudeを鍛え、その上にSkillを身に着けよ、そしてその両方を支える肉体Physicalも大切で、これらのバランスの取れた形成こそが青少年教育の神髄であり、その環境はぬるま湯ではなく厳しいハードトレーニングでなければならぬという事だったと今にして思う。これが知・徳・体の三育を象徴する校章を持つ秋田高校150年の学びの伝統であると思う。

Profile

しんどう・こうせい/1949年生まれ。一橋大卒。在校時ラグビー部、生徒会長。新日本製鉄(現日本製鉄)に入社。人事・総務・企画等の業務に従事。1982年ハーバード大学経営大学院MBA課程修了。2014年代表取締役社長、2019年代表取締役会長。元経団連副会長、日本ラグビーフットボール協会評議員

自由と自立の精神が 活路を開く



東洋経済新報社
取締役会長

駒橋 憲一
(昭和50卒)

東洋経済新報社といっても、高校生の皆さんには馴染みがないでしょう。主にビジネスパーソン向けの雑誌や書籍の発行、オンライン発信を行っている出版社で、創業128年になります。そんな古い会社ですが、実は創業者は秋田中学出身（卒業当時は秋田師範学校中学師範予備科）の町田忠治です。後に銀行家を経て秋田選出の衆議院議員となり、昭和の戦前期に数々の大臣を歴任しました。

町田の基本精神は自由主義にあります。町田は秋田にいた犬養毅に師事し、自由民権運動につながるジャーナリストとして活躍。欧米への遊学で経済雑誌の影響に感銘し、帰国後、『東洋経済新報』（現『週刊東洋経済』）という雑誌を創刊しました。

私は町田のことなど知らぬまま、たまたま縁あって入社しました。先輩に「秋田出身なら町田忠治を知ってるか」と聞かれ、ドギマギした次第です。しかし、自由闊達な社風にすぐ親しむことができました。後から思うと、町田が秋中時代からの自由な精神を会社の礎にした伝統が続いていたのでしょう。

私が秋高にいた1970年代前半は、いわゆる学生運動が下火になりつつも、入学前年に着装自由化が実現。石油ショックや狂乱物価で大変な時代でしたが、明日は今日より良くなると信じられる、いい時代でした。それは恵まれていたと思います。

しかし、就職して社会に出ると思い通りにいかないことばかりで、自分の限界に悩まされる日々でした。でも、自分なりに遮二無二、突っ走るしかありません。前向きに不安を乗り越えるには、それなりの負荷を糧に背伸びすることで活路を開く。つまりは、自由な精神に基づいた自立性だと思いました。

私にとって、それは秋高時代に感化され、培われた「何か」だったという気がします。時代は移ろいゆきますが、自由と自立の精神は受け継がれ、一人一人の生き方を支えていく。それが秋高の伝統というものでしょうか。

Profile

こまはしけんいち／1957年生まれ。北海道大卒。東洋経済新報社に入社。『週刊東洋経済』等の記者・編集部を経て、『会社四季報』編集長。取締役データ事業局長。2017年代表取締役社長。2022年12月より取締役会長。

迷っている人は一歩前に



秋田県医師会会長

小泉 ひろみ
(昭和49卒)

創立150周年おめでとうございます。私が秋高生だった時に、100周年がありました。寄稿をさせていただくのは、ご縁も感じつつ、大変名誉に思います。

当時から「自主独立」の校風であったように思います。ちょうど、制服自由化で、生徒と学校の交渉が何度もありました。体育館に集まり、体育座りで話し合いを行なったことを思い出します。今でしたら、生徒がアンケートをとったり、パワーポイントでプレゼンしたりするのですが、当時は理念を持った方たちの演説に賛同したのではなかったでしょうか。学校側が認める形となり、制服自由化が実現しました。最近、私がお会いした生徒さんは、性的違和に悩まれ、制服が自由であることから、秋田高校を選択しました。このような方は、ごく少数派ですが、そのような選択が許されることは、大変重要なことだと感じています。「自由」には、「責任」が伴います。秋高生、卒業生、皆様が誇りをもって、前に進むことができるといいなと願っています。

さて、私は、高校生時代の自分は、精神的に不安定であったように思います。「何者でもない自分」「何も持っていない自分」であることから、あえて笑ってもらうことに重きを置いていたように思います。医学部に進み、学生として楽しく過ごしていた時も、まだ不安定でした。医学の道に進んだ皆様は、それぞれ目標があると思いますが、私自身は「医師になったこと」で、自分のメンタルの不安定さから、救われました。今、秋高生である皆様は、前向きに目標を決めて進んでいってほしいのであれば、ぜひ迷わず進んでいただきたいと願います。もし、迷いや苦しみの中におられる皆様の場合は、「とにかく一歩足を出すこと」、何か行動していただくことをお願いしたいと思っています。また、大人になって思うのは、「愚痴も言える（友）人」がいることの大切さです。私自身は「絆」という言葉に危うさを感じる人間ですが、「言える」関係性は良いと思っています。

Profile

こいずみひろみ／1955年生まれ。東京女子医大卒。1993年4月～2019年8月市立秋田総合病院勤務。2019年9月秋田こどもの心と発達クリニック開業。秋田県医師会においては、2008年から常任理事、副会長。2022年6月から会長。

バスケットに没頭した3年間



前東京大学医学部附属病院長

瀬戸 泰之
(昭和52卒)

秋田高校150周年誠にありがとうございます。秋田高校卒業生として嬉しく、また大変誇らしく思います。土井晩翠先生作詞の校歌は今でも諳んじることができますし、梁田貞先生作曲のメロデイも口ずさむこと屢々です。3番中の「生まれし秋田の土こそ薫れ 先蹤追いつつ未来の望」は正しく今においても痛切に感じ入るフレーズです。

そして、“文武両道”こそ秋田高校最大最良のモットーだと思います。斯く言う自分も3年間の在学中はバスケットボールに没頭しておりました。残念ながら、文武両道とはいかず1年間の浪人生活を経験しましたが、3年間は何事にも代えがたい時間でありました。

剣道部は全国優勝を果たしていますし、野球部も甲子園での第1回大会準優勝が有名です。バスケットと言えば、当時能代工業全盛期で2年連続全国3冠を達成しておりました。我々3年時には、能代工業が前年優勝校としてインターハイに推薦出場でしたので、秋田県からもう1校出場できることになりました。秋田高校バスケット部は東北大会で3位になるなど実力、下馬評ともによかったのですが、県内決勝で雄物川高校に敗れ結局インターハイ出場を果たせませんでした。

人生において痛恨の極みで、今でも夢にみえます。ただ、その時の経験、体験が今の自分を造り支えてくれていることも間違いありません。大学入学後もバスケットは続け、医学部の大会（全医体）では北海道大学医学部（実は北大医学部は北大全学運動会バスケット部より強く単独でインカレに出場していました）には敗れましたが準優勝を達成できました。

医者の世界はけっこう狭く、今でも他大学出身の医師からも当時のことは言われますし、それで酒席も盛り上がりやすい。横の繋がり（大事です！）も深まります。もちろんスポーツだけではないと思います。一人一人にそれぞれの個性があって然るべきです。ぜひ悔いのない秋高ライフを満喫し大きく羽ばたいてください。皆様のご活躍を期待しております。

Profile

せと・やすゆき／1958年生まれ。東京大医学部卒。医学博士。国立がんセンター癌専門研修医。東京大学附属病院第一外科医局長 東京大学医学部消化管外科講師。医療法人明和会中通総合病院副院長 癌研究会附属病院消化器外科医長。東京大学医学部消化管外科学教授 2019年4月～2023年3月東京大学医学部附属病院長

張り巡らされる樹木の根



春風社
代表

三浦 衛
(昭和51卒)

本を読まない子どもだった。小学校の参観日に、ほかの子の日常を耳にした母は、あるとき、本を買ってきた。夏目漱石の『ころ』。函入りの立派な本だった。数ページで読むのを止めた。どうしてその本だったのか、のちに尋ねたことがあるけれど、母は、そのことをすっかり忘れていた。しかし、本の種は、このとき蒔かれた。

高校入学後、母にももらった本のことを思い出し、『ころ』を読んだ。今度は読み終えた。衝撃を受けた。『ころ』には友人を裏切り、死に追いやった罪を生涯もちつづける「先生」が登場する。この本を読まなければ、その後のわたしの人生は、いまと違ったものになっていたかもしれない。

秋高の生徒たちは、みな勉強ができた。ついて行くのがたいへん。勉強がそれほど得意でないわたしは、これからは、なんでも、コツコツやろうとところに誓った。先輩や友の話に耳を傾け、語らいにこころを熱くし、友情を知ったのも高校時代だった。

大学に入り、第二外国語としてドイツ語を選択。定評のあるキムラ・サガラの『独和辞典』を購入。キムラ・サガラのキムラが、木村謹治という、大川村（現在は五城目町）出身で、秋田高校の前身・秋田中学の卒業生であることを、あとで知った。また、秋高の校歌を作詞した詩人・土井晩翠も敬愛した特異なキリスト者の著作集を、みずから出版することになるなど、当時のわたしは、知る由もない。

勤めていた出版社が倒産し、自分で学術書の出版社を起こして20年が過ぎたころ、夏目漱石の研究をライフワークとする著者の本を編集し出版、書名を『漱石論集 ころのゆくえ』とした。程なくして、同窓会から声をかけていただき、いま、母校の150周年を記念する『新先蹤録』の編集に携わっている。

高校の3年間は、あとから思えば短いけれど、その後の人生を指し示し、やがて寛ぎと安らぎの影をなす樹木の根が、大地の各所に張り巡らされ始めていたと思わずにいられない。

Profile

みうら・まもる／1957年生まれ。東北卒。神奈川県内の私立高校に7年間勤めた後、東京都内の出版社に勤務。1999年、横浜で春風社を創業。人文系の学術書を中心に現在（2023年）まで約1000点を出版。著書に『父のふるさと 秋田往来』『文の風景』、詩集に『鱒 hadahada』、句集に『歌』、共著に『対談集 春風問学』（以上、春風社）など。

「シュウコウ」は特別



専修大学野球部
監督

齋藤 正直
(昭和54卒)

創立150周年誠にありがとうございます。

私は現在専修大学野球部の監督を務めており、部員一人一人に対し、大学野球を通じ成長を促す日々を過ごしております。(口うるさい親父です)私自身、高校、大学、社会人と20年以上野球を続けましたが、社会人野球の監督を離れた39歳の時に本社営業への異動辞令が出ました。本社など都市対抗出場報告以外行ったこともありませんでした。このような中で、39歳新社会人生活が始まりましたが周囲の話す営業用語は勿論、鉄に関する知識も殆ど無い為宇宙人の集団にいるような日々を悶々と過ごしていました。

「石の上にも三年」の諺がありますが、まさにその通り、3年目を迎える頃には営業が天職くらいの顔つきになっていました。

専修大学の監督に就任するまでの15年間営業部門に在籍していましたが、その間多くの「シュウコウ」の先輩に助けて頂きました。しかしそれはお会いしたことの無い先輩ばかり。取引先の気難しい資材部長が、笑顔であなたの先輩には駆け出しの頃大変お世話になった。また大学の柔道部の先輩が「シュウコウ」出身の方で面倒見て貰ったと話してくれた商社の部長等、このような話はあまりに多く、枚挙に遑がありません。

150年の歴史を持つ「シュウコウ」は特別なものです。それは勉強が出来てエリート意識を持つと言うことではありません。「シュウコウ」に入学したからには、将来その身に付けた能力を正しく社会に還元する使命を帯びていると言うことです。数多くの先輩がそうしたように、歴史を紡ぎ新たな道標を立てる責任が私達にはある、それが「シュウコウ」の誇りであり、特別であるという意味だと思います。

在校生の皆さん、人生は短く、そして青春は瞬間に過ぎ去ります。思い悩んでいる暇は有りませんよ。明るく前向きに、そしてひたすらに一步一步を踏み出して下さい。皆さんの足跡こそが、未来へと導く道標となるのです。

Profile

さいとうまさなお／1960年生まれ。専修大卒。川崎製鉄(現JFEスチール)入社。1994年～1998年川崎製鉄千葉監督、都市対抗準優勝等。1999年～2013年営業職となり主に造船・プラント電力他への営業に従事。2014年～専修大学野球部監督(現職)

広がる宇宙、広げる世界



次世代超大型光学赤外線望遠鏡
TMTプロジェクトメンバー

林 左絵子
(昭和52卒)

150年前、秋田高校の前身が一期生を迎えていた頃、太陽系の最遠天体は海王星、天の川銀河がこの宇宙で最大の構造だった。その後、太陽系については探査機が「現地調査」を行うようになり、海王星以遠の天体も続々見つかった。アンドロメダ銀河が、天の川の中の星雲ではなく、光の速さで230万年かかる距離にある大きな銀河であり、さらに無数の銀河があることが判明してきた。人類が認識できる宇宙は、今や光速でも137億年かかる距離まで拡大。しかもこの宇宙全体が広がっているのだから、果ては無いようなものだ。このように認識できること自体、人間が人間たる由縁なのではなからうか。

それから、地球に似た環境がよそにもあるだろうか。水のありそうな惑星が太陽系以外に見つかった。そうした「系外惑星」には生物がいるだろうか。水と言えば、月や火星の有人探査にとって重要な物質。現地調達できると良いので、様々な探査が進んでおり、氷の存在が示唆されている。

自分自身が高校生の中には、授業中なのに頭の中は空を飛んでいた。図書室に入り浸っては科学解説書やSFを読み漁り、部活(吹奏楽部)に熱中。女子×4年制大学×理工系が希少な現実を見ていなかった。ただひたすら自然現象の不思議を理解したいと思っていた。苦手な数学も、解けるまで粘れば良いのだ(苦手な家庭科は、粘らなかった)。

大学院卒業後は、その不思議を解明するための望遠鏡作りに関わってきた。これは面白いプロジェクトの開始時期に巡り合わせた幸運のおかげだ。今は、国際協力プロジェクトのため、米国で(背の高さも実績も)巨人の同僚と一緒に、今までになかった物を作るため、技術面のさまざまな課題を解決しながら設計や実際の物作りを進めていて、とても楽しい。高校生の時には全く考えてもいなかったところで仕事をしている。夢は大きすぎることはない。宇宙は広がり続けているのだから。

Profile

はやし・さえこ／1958年生まれ(旧姓 鈴木)。東京大院卒。理学博士。英蘭加連合天文台を経て、国立天文台の助手、助教授・准教授、および総合研究大学院大学の教員併任。次世代超大型光学赤外線望遠鏡TMTのプロジェクトメンバーとして、カリフォルニア州パサデナ市にあるTMT国際天文台本部勤務。

目標に向けて“良い努力”を



有人宇宙システム株式会社
ISS利用運用部長
兼新事業開拓室長

佐藤 巨光
(昭和63卒)

私は、国際宇宙ステーション（ISS）に関わる仕事をしています。高校1年の時には、航空宇宙学科のある大学へ行こうと決めていました。一方、部活は水泳部に所属し、授業後にはプール脇の部室に行き、18時過ぎまで泳いでから帰宅する生活でした。秋高は昔から文武両道の伝統があり、勉学と部活を両立させていた生徒が多くいましたが、当時の私の目標は、①航空宇宙学科のある大学に行くこと、②水泳部を続けること、だったと言えます。大学は志望通りの航空宇宙学科のある大学に合格し、そこで博士課程まで行きました。その後、民間企業に入社し、現在まで同じ会社で国際宇宙ステーションに関わる業務を続けています。

高校生活を振り返ると、幸いだったのは、自分がやりたいと思込めるもの（宇宙開発）に早い段階で出会えたのと、学校の勉強と部活動を両立させるために、時間を効率的に使う方法を習得できたこと、の2つだと思います。秋高の皆さんには、“自分の好きなこと、やりたいこと”にできるだけ早く気づき、それに向けて“良い努力”をして頂きたいと思います。今は、まだ将来何をして良いかわからないという方もいらっしゃると思いますが、自分が何をしたいのかを常に考えることは大切です。さらには、何かを成すにも万能な方法はなく、その時々状況に応じて柔軟に対処する必要もあります。マニュアルなどに依存せず、自分で考えるやり方にトライしてみてください。それが良い努力につながると思います。

現在は、国際宇宙ステーション以後の時代（「ポストISS時代」）に向けて、民間宇宙ステーションでのビジネス開発に携わっています。これまでのやり方に固執しては新しい時代には対応できませんし、誰も正解を知りませんので、自分で考え、試行錯誤するしかありません。皆さんの時代に有人宇宙開発を引き継げるように頑張っていきたいと思っています。

Profile

さとう・なおひろ／1969年生まれ。東京大院卒。工学博士。有人宇宙システム株式会社（JAMSS）に入社。「きぼう」（JEM）宇宙飛行士訓練を立ち上げた。2016年よりJAMSSの新事業開発に従事し、ISSでの民間サービスを実現。2022年より、現職のISS利用運用部長、新事業開拓室の室長を兼任。

何か一つ 夢中になれるものを



秋田ノーザンブレッツR.F.C
初代監督

新出 康史
(昭和56卒)

高校時代はOBだった父の影響もあり、ラグビー部に所属、どちらかというと部活優先の高校生活を送りました。文武両道を意識しつつも、3年時の総体で当時圧倒的強さを誇った秋田工業に肉薄してからは、さらにラグビー一辺倒になりました。結果的に、最後の全国大会予選は決勝で秋工に敗れ念願の花園出場は果たせませんでした。仲間と力を合わせ、秋工に勝ちたい一心で様々な内発的努力をしたことは、自分の人間形成において本当にプラスになったと感じています。

少ない部員、学業とのバランス、変形グラウンド、決して恵まれているとはいえない環境の中で、自らの意志で強敵に挑む。秋高ラグビー部での経験は、様々な困難が立ちはだかる人生の第一幕だったように思います。

その後、明治大学、秋田市役所、秋田ノーザンブレッツで、選手・指導者として長くラグビーに関わってきましたが、その中で、よい仲間にも恵まれ、人間としても成長させてもらいました。

このような経験は、秋高時代の部活動を通じて得たものがベースになっており、後輩の皆さんには、勉強に加え、スポーツや文化活動など何か一つ夢中になれるものを高校時代に見つけてほしいと思います。その中で、目標達成のため、努力や創意工夫により困難を乗り越えることで、高校生活が充実するだけではなく、その後の人生も一層豊かなもののできるのではないかと思います。

少子化・人口減少が進む中で、秋高の各クラブの運営は困難に直面していることと推察します。そうした中で、この春4年ぶりに秋高ラグビー部の部員が、単独チームを組織できる15人になりました。

部活維持と部員勧誘に励んだ監督、選手各位に敬意を表するとともに、最近、近所のラグビースクールに通いだした小学1年の孫が、父、私、娘・息子に続く、4代目の秋高ラグビー部員になることを密かに期待しているところです。

Profile

しんで・やすし／1963年生まれ。明治大卒。明治大1年次に大学選手権優勝メンバー。その後、秋田市役所ラグビー部では全国社会人ベスト8、国体3位。34歳で同部監督に就任。その後、秋田ノーザンブレッツR.F.Cの初代監督、ゼネラルマネージャーを歴任し、現在同クラブ理事。秋田市役所では産業振興部長を経て現在新エネルギー産業推進担当部長。

旅立つ君へのメッセージ



新政酒造株式会社
代表取締役社長

佐藤 祐輔
(平成5卒)

©船橋陽馬(根子写真館)

きっとこの文章を読んでいる秋高生の少なからぬ割合が、早く秋田を出て何処か他所で大学生活を過ごしたいと考えているのではないのでしょうか。私は音楽鑑賞や楽器演奏が趣味で、高校時代はろくに勉強もせず、昼食代をこつこつ貯めては、中古レコード屋で音源を漁りまくり、家にこもってひたすら聴き続けるというような日々を過ごしていました。念願の東京生活が始まってからは、さらに音楽漬けの生活が実現することになりました。しかし、いつしか文学に興味に移り、大学の卒業後は、編集や記事執筆の仕事をするようになりました。

しかし気づいてみると、わたしは現在秋田にいて、もう15年も日本酒を造り続けているのです。酒の記事を書こうと思ったことがきっかけで、この仕事に縁ができたのです。人生何が起こるかかわからないものです。現在、わたしが経営している新政酒造は、かつて消滅寸前であった山間の農村でお米を育てています。そしてそんな米を用いて、昔ながらのやり方で酒を造っています。一見するとまったく時代と逆向きのことをしているかもしれません。けれど、そんな田舎で造られた時代錯誤の日本酒が少しずつ国内外で注目を浴びはじめてきているのです。

今、秋田県は高齢化による人口減少や経済の沈下などによって、芳しくない一般的な評価を得ています。たしかに秋田から人口が流出してしまうのは、仕方ないことかもしれません。しかし多くの人を選ぶ道が正しいとも限りません。むしろ宝物は、誰もが見過ごしてしまうところにあるものです。私が思うに、秋田には、眠れる宝物が無数にあると感じます。それらは、故郷から旅立つ必要のある秋高生たちの眼前にすでにあるのかもしれません。

もし世界を旅して疲れ果てたなら、故郷を思い出してください。あるいは、その場に打ち捨てられた何かに目をこらしてみてください。放浪し尽くした者の瞳に、なにかが映るかもしれません。

Profile

さとう・ゆうすけ/1974年生まれ。東京大卒。編集者、フリージャーナリストとして活躍後、2007年に新政酒造に入社。2012年に同社代表取締役に就任。今に至る。

「文武両道」を毎日やり抜く



日本スケート連盟強化本部長
副本部長

湯田 淳
(平成3卒)

高校時代の印象を思い返すと、「文武両道」の毎日だったような気がします。小学2年に出会ったスピードスケートを高校でも続け、中学校から師事していたコーチの下で、校外にて様々な年代の選手と共にトレーニングに励みました。

高校での目標をインターハイでの表彰台と設定し、目標達成の方策を常に考える日々を送りました。学年が上がるにつれモチベーションも強まり、競技スポーツに深く関わりたいという希望から進路として筑波大学(体育専門学群)を設定しました。合格可能な学力水準を確保しつつ、いかにスケートのトレーニングを効果的に進めるかが重要で、勉強は高校の授業やスキマ時間をうまく活用して済ませ、多くの時間をスケートに割くよう工夫していました。高校3年時、1月の大学入試センター試験を終えてすぐにインターハイの開催される山梨県に移動し、数日後のレースで3位入賞を果たせた際の達成感は忘れられません。

もう一点、印象深いのは秋高の自由な校風です。服装の自由に加え、自動二輪免許を取ることも許されていました。それまでの貯金で高校1年の夏に普通自動二輪免許を取得し、その後も小遣いを貯め続けて春には中古バイク(250cc)を購入しました。校外での様々なトレーニング場所への移動手段となると同時に、気分転換となる趣味となっていたと思います。自らアクセルを回して得られた急激な加速感は、自身の限界を打ち破るような刺激的で心地いいものであったのを記憶しています。

同じ加速感でも、ジェットコースターは好きではありませんが、自身が操作するものではなく成すがままの状態に晒されているのが嫌なのかもしれません。思い返すと、秋高の「自主自律」の精神に心身ともに忠実に従っていたのかとも思えます。在校生の皆さんには、すべきことを見つけたならば労を惜しまずにエネルギーを注いで欲しいと思います。結果の如何に関わらず、そこで過ごした時間は価値あるものとなるはずで。

Profile

ゆだ・じゅん/1972年生まれ。筑波大院卒。同大大学院にて、体力トレーニング論で修士号、バイオメカニクスで博士号を取得。スピードスケート競技引退後、(公財)日本スケート連盟強化スタッフとして活動し、冬季オリンピック2018平昌大会・2022北京大会では監督として複数メダル獲得を牽引(現在、同連盟強化本部長)。日本女子体育大学教授。

秋田から世界に繋がる道



一般社団法人ドチャベンジャーズ
理事

丑田 香澄
(平成15卒)

秋田にUターンし、「世界一子どもが育つまち」の合言葉を掲げて仲間と五城目町で活動し始め十年目になる。小さな町から世界へ突き抜けるほどの大きな視野で、と皆で決めた言葉だが、近年では少子高齢化社会のあり方を日本から学ぶとして英誌『エコノミスト』に取り上げていただいたり、地方創生優良事例として首相官邸で取組発表をさせていただいたり、人口減少・高齢化が日本一進む秋田の地からこそ、むしろ世界に新たな価値観や事例を提供できるのではと感じている。

何より、二度目の秋田生活は実に楽しい。郷里の豊かさを享受しながらも仕事・学校・住居・コミュニティなどをより楽しくするには？と、伝統や先人たちの知恵を生かしつつ更新し創造するような、クリエイティブで遊び心満載の日々を味わい続けている。

とはいえ、高校卒業時の私は、秋田にいる未来を想像もしていなかった。都市や海外ならではの世界や仕事が多くある中、外に飛び出したいというのはごく自然で素敵なことだ。私自身、母になり子育て環境として秋田を見つめ直すなど状況に応じた心境の変化や、そんな折にご縁が重なったことで、気づけば帰郷というのが正直なところだ。

子供の「教育留学」を機に転入されてきた最新移住者である秋高の先輩も、地域の温泉復活プロジェクトにリーダーとして秋田市から通い活躍してくれた現役秋高生（当時）も、「思いがけず」五城目に辿り着いたと口を揃える。何事も変化するのが世の常だが、まして変化の激しい時代と言われる今、変わる環境自体を楽しみ、ありがたい道を柔軟に進む、そんな自主自律の精神はますます必要不可欠と言えるかもしれない。

こうした秋田での取組に少しでも興味がある在校生などはどうか気軽にご連絡いただきたい。高校生の頃、先生方に留学や進学挑戦の後押しいただいたこと、今なお沢山の同窓生から気づきや学びをいただいている中、私も次代の一応援団でありたい。

わくわく、わいわい、歩んでいきましょう！

Profile

うだかすみ／1984年生まれ(旧姓石岡)。慶應義塾大卒。IBM勤務を経て、出産後の母親を支える「(社)ドゥーラ協会」起業、現理事。2014年に秋田に帰郷、五城目町地域おこし協力隊として活動。現在、まちづくり団体(社)ドチャベンジャーズ理事。内閣官房ふるさと活性化支援チーム委員。NHK東北地方放送番組審議会委員。

秋高祭での振り付けが原点



NHK「おかあさんといっしょ」
4代目身体表現のおねえさん

いとうまゆ
(伊藤 美帆)
(平成11卒)

秋田高校でお過ごしの方、自由な校風の中楽しい学校生活を送ってますか？

高校に入学してダンススタジオに通いながらダンス同好会を立ち上げ、踊りに没頭していた日々は人生の中でも一番手放しに楽しんでいた時期かもしれません。

宵祭と夜祭で、学年にこだわらずメンバーを募り、振り付けした作品を練習して発表したりしてました。(今もやってますか?)

その後、一緒に踊った先輩が卒業する時に「受験勉強でストレスたまった時にあの時のダンスを踊ってストレス発散してたよ、ありがとう」と言われた時が、今の活動のターニングポイントになっています。

それまでは自分が踊って見せることに夢中でしたが、振り付けを作ってお伝えしてみんなで踊るという経験をシェアすることでも喜んでもらえるのかと、嬉しい発見でした。

「おかあさんといっしょ」で親子の皆さんと触れ合う時に子供たちのことはもちろんですがお母さんの存在も気にかかっています。

お子さんが小さい時のお母さんは、子供のためにご自身の都合や身体を労わることは後回しになりがちですよ。でも、お母さんが元気じゃないと子育てにも支障が出てきます。お母さんが元気でいられると結果家庭も上手く回って明るくなりますよね。

なので、今は子供のダンススクールの他に、お母さん向けにトレーニングで体づくりをしたり、その動けるようになった身体でダンスを楽しんだりするコミュニティーを運営しています。

今はSNSで欲しい情報や観たいものが沢山観られる可能性に溢れた時代ですよ。

私もインスタやTik Tokを苦戦しつつやっています。若い人のやり方を眩しく眺めて学んでいます。(毎日投稿、なかなかできない。笑)

秋田高校の皆さんの今、そしてこれからのご活躍を楽しみにしています。

頭と身体をフルに活用して好きなことがあれば手放しに楽しんでください。

Profile

いとうまゆ／1980年生まれ。筑波大卒。ダンサーとして活動したのち2005年4月から2012年3月までの7年間NHK「おかあさんといっしょ」で「ズーズーダンス」「ゴッチャ！」のおねえさんを務めた。番組卒業後、キッズダンススクールや大人向けのオンライントレーニングスクールを主催。

秋田高校 同窓会だより

AKITA HIGH SCHOOL alumni association news

創立150周年記念臨時増刊号

編集後記

創立150周年記念臨時増刊号をお読みいただきありがとうございます。

母校の創立150周年を祝うと共に、「秋高」の伝統と歴史を次世代へいかに繋いでもらうか——。そんな狙いで同窓生の皆様に、次代を担う在校生や未来の秋高生たちに伝えたいこと、期待することを盛り込んだ原稿を執筆していただいたところ、当方の狙いを遥かに超える読み応えのある原稿ばかりが集まりました。素敵な増刊号を発行することができ、企画した者として大いに感動している次第です。

末尾になりましたが今回原稿を執筆頂きました同窓生の皆様には心より感謝申し上げます。

秋田高校創立150周年記念事業広報委員会
副委員長 菅原 貢（昭和50卒）

一輪車に乗り続けて



シルク・ドゥ・ソレイユ
一輪車パフォーマー

西澤 春佳
(平成26卒)

私の人生の転機となった出来事の一つは、秋田高校在学中にダンス&ボーカルグループ・EXILEの全国ツアーに一輪車パフォーマーとして出演したことです。「競技」としての枠を超えて「エンターテインメント」としての一輪車の新たな魅力や可能性を感じ、将来の視野が広がりました。その時の会場の雰囲気や歓声を忘れられず、いつか再び味わいたいと思いながら大学に進学した後も一輪車の練習を継続していました。

しかし大学では、オリンピック選手や若手起業家など信念を持った「プロ」の友人達と出会い、彼らの姿を見て一輪車の演者としての自信を失ってしまいました。一輪車を職業にしたい思いはありましたが、当時の私には覚悟やビジョンが足りず一輪車を軸にして活動することは諦め、卒業後は秋田市のテレビ局に就職しました。しかしそこでも転機がありました。自分の信念を貫きながら様々な分野で活躍されている秋田高校の先輩方を取材する機会が幾度もあり、多くの刺激を受けたと同時に、私も得意な一輪車で何かできないかと再び思い始めたのです。

その後家族の支えもあり、改めて真剣に一輪車に取り組み始めると、運と人脈に恵まれて幼い頃から憧れていたシルク・ドゥ・ソレイユの一員としてアメリカで働く機会を得られ、今に至ります。世界が広がることは可能性を見出す反面、自分の無力さを知ることにもなります。しかし自信を失ったことも含めて、全てが自分にとって必要なことであつたと信じています。

秋高生の皆さんにも、将来への迷いや葛藤が多くあるかと思いますが、それも人生の大切な1ピースです。世界はとても広いですが、勇気を持って少し踏み出すと、思っているよりもずっと近くにあります。人との繋がりを大事にしながらか自分のやりたい道を信じ続けていると、どこかで誰かが見てくれている、そんな時代だと思っています。千載一遇のチャンスを逃さず、自分の人生を楽しみながら創り上げてください。今後のご活躍を心より期待しています。そして皆さんが、もしフロリダ州を訪れることがありましたらぜひ私のショーを見て頂けたら嬉しいです。お待ちしております！

Profile

にしぎわ・はるか／1995年生まれ（旧姓佐藤）。慶應義塾大卒。元秋田テレビアナウンサー。4歳から一輪車に乗り始め、2度の世界チャンピオンを経験。2021年に渡米しエンターテインメント集団「シルク・ドゥ・ソレイユ」の常設ショー Drawn to lifeに一輪車パフォーマーとして出演中。アメリカ・フロリダ州在住。ミズ株式会社所属。



秋田高校
同窓会だより

2023年9月1日
創立150周年記念臨時増刊号

発行者／秋田県立秋田高等学校同窓会 秋田市手形字中台1番地
電話 018-832-9553 FAX 018-832-9588
印刷／秋田協同印刷株式会社